

元代カラホト文書解読（１）

古松崇志（京都大学人文科学研究所）

この小稿では、元代エチナ路総管府跡（＝カラホト、黒城）から出土した文書（李逸友編著『黒城出土文書（漢文文書巻）』、内蒙古額濟納旗黒城考古報告之一、北京、科学出版社、1991所収）を解読して紹介していく。今回紹介する文書の解読は、二〇〇一年八月八日総合地球環境学研究所オアシスプロジェクト第二回勉強会（於河口湖）において筆者が担当して会読を行ったもので、その場で諸先生方から出されたさまざまな議論をふまえた共同研究の成果である。ただし、内容分析と文責の所在は筆者にある。李逸友編著『黒城出土文書（漢文文書巻）』下編には出土文書の録文を載せ、その内容ごとに十九の項目に分類しているが、今回の紹介では、そのうちの農牧類から始めることとした。それはこのオアシスプロジェクトの目的・構成員・分野などいくつかの理由から、自然と人間の関わりを知るうえで、最も手身近な農業・牧畜関係からスタートすることが適当であると考えたからである。

今後掲載する第二回以降も含め、すべての文書解析は以下の体例の通りに列挙する。

- ・元の原文（『黒城出土文書』録文をそのまま掲載）
- ・訂正した原文
- ・現代語訳
- ・語注
- ・全体の要約と議論（議論は、会読参加者から出されたものを適宜掲載する。）

原文の凡例

＝一字欠字

□（元の原文）■（訂正した原文）＝二字以上欠字

⊙（元の原文）△（訂正した原文）＝朱紅色の官印

なお、今回の解読は推測も多く、一つの仮説にすぎない部分が多いことをあらかじめお断りしておかねばならない。というのも、文書を史料として用いる場合、言うまでもなく実物を手にとり、「モノ」として分析する必要があるが、カラホト文書の場合それは不可能だからである。現状としては『黒城出土文書』下篇掲載の録文に頼らざるを得ないが、『元典章』をはじめとする元代典籍に残る文書などから得られる知見に基づき、一見大胆な読み直しをしている部分も多くある。録文とは異なる文字に直した箇所には*を付け、『黒城出土文書』の録文原案を採るにせよ、字を改めるにせよ、疑問の多いところには?を付けておいた。今回の訳稿はあくまでも途中報告の段階にあるものであり、今後改善を重ねていくことを期したい。

陸、農牧類（P.101～106）

一、農政

1. F257:W6（竹紙、残、行草書、縦273mm×横211mm）

□前去合行回关讞

照驗施行須至□者

一总计本□点視所轄農民二十三屯

計肆伯四十叁戸八百四十三丁

一千五十令七口照得

□系□近各

家園内栽□□倘若依

例每丁栽樹二十株却緣本

處地土多系硝碱沙漠石川

不宜栽種

■開*坐*前去(1)。合行回關(2)、請*(3)

照驗施行。須至關*者(4)。

一總計本職*(5)点視所轄農民二十三屯、

計肆伯四十叁戸・八百四十三丁

一千五十令七口(6)。照得、

□系■近各
家園内栽□□、倘
例毎丁栽樹二十株(7)、却縁本
処地土多系硝・沙漠・石川(8)、
不宜栽種、

……箇条書きにしてい。返答の関を送るべきであり、ご検討の上ご処分していただきたく願います。
関を送るべきものであります。

一、わたくしめが点検する所轄の農民を総計しますと、23屯、計443戸、843丁、1057口になります。さて、□は……に係り、……近ごろ各家の園地の中で□□を植えています、もし決まりに従って一丁ごとに二十株を植えれば、かえって当地は土地が塩分の多い地、沙漠、礫地(=ゴビ)であることが多いので、(樹木を)植えるのには向いておりません。……(以下欠)

(1)開坐前去：本文書は、三行目に「一、……」とあって、報告内容が箇条書き(「画一条列」という)になっている。『元典章』を参照すると、箇条書きを文書の末尾に列挙する場合に、箇条書きに書き記すことを意味する「開坐前去」と記される例が多く見られるので、「開坐」の二字を補った。

(2)回関：文書の名前。回とはある問い合わせに対する返答を意味する。『元典章』にみえる文書の分析から、「関」文書が用いられるのは次の二つの場合であることが分かる。①統属関係のない同格の役所同士とのやり取り。②ある役所とその役所に属する官僚の間のやり取り。(「牒」を用いる場合もあり)ここでは、文書の内容より後者であると考えられる。エチナ路に所属する官僚がエチナ路の役所に宛てて送った文書と想定される。

(3)請：原文の「訖」ではうまく読めない。「請照驗施行」というのが文書の結びの決まり文言なので、正しくは「請」である。恐らく「請」を転写の段階で誤ったものであろう。

(4)須至関者：文書の結びの決まり文言。原文の□には文書の種類の名前が入る。この文書は「関」なので、「関」という文字が入る。関文書の定型については、『翰墨全書』にみえる。

(5)本職：本文書はある官僚が送った文書であると考えられるので、ここでは「職」の字を補った。「本職」は官僚の自称。

(6)丁、口：「丁」とは労働年齢の男子を指す。「口」は女性・老人・障害者・子供も含めた人口。ここで挙げられている数字はエチナの屯田の中でどの部分を指すのかは明らかでない。ただし、この数字データは屯・戸・丁・口すべてがそろっている、屯田組織の規模や家族構成の想定が可能となる。つまり、一つの屯田組織(屯)ごとに約20戸が編成されている。そして、一戸あたりは約二丁であり、丁以外の口数は少ないことが分かる。丁4に対して口が5という割合は、F1:W51(P.92)文書にみえる吳即渠の大口(すなわち丁)・小口(丁以外の人口)のバランス(4:1)とほぼ一致している。圧倒的に労働人口が多く、非労働人口は少なくなっており、国家の人為的な力によって屯田開拓が行われていることが分かる。いっぽう、これとは別の解釈も成り立ちうる。それは、ここに見える1057口という口数の中には、丁が含まれないとする考え方である。この場合、労働年齢の男子4に対しそれ以外の女性・老人・障害者・子供が5ということになり、比較的自然的な形に近い家族構成となる。以上のいずれの解釈をとるべきかは更に検討を要する。

(7)依例毎丁栽樹二十株「例に依り毎丁二十株を栽樹す」：大元ウルスでは、農民一丁あたり、毎年桑や棗(なつめ)の木二十株を植え、桑や棗が向かない土地では榆や柳などその土地に応じた木二十株を植えるように規定されていた。これは、農業振興を仕事とする大司農司という役所が至元二十三年(一二八六)に設立されたときに制定されたものである。本文書は、国土全域にわたって大規模に農業振興政策が推進されていたことの証拠ともなるものである。

(8)硝碱・沙漠・石川：いずれも乾燥した荒れ地を指すが、「硝碱」は塩が吹き出している乾燥地、「沙漠」は砂の砂漠、「石川」(川はもともと平原を意味する)は礫砂漠(すなわちゴビ)。

エチナ路総管府のある官僚が管轄下の農地に実地検分に行き、それについてエチナ路総管府に向けて報告した文書で、そのうちの本文末尾の部分とその後列挙される箇条書きの最初的一条目が残存したもの。内容は、エチナ路における農地管理に関するもので、報告した官僚が管轄する地域(具体的には不明)の屯田組織(屯)、戸数、丁数、口数のデータが報告され、その後エチナ路の土地が樹木栽培には

向かないことが報告されている。このうち、栽培に向かないという乾燥地が三つのカテゴリーに分けられ認識されていたことは注目される。

<議論>

ここに問題となっているような、乾燥地域における灌漑農業に従事する人口集団や村落集団については、国家の政策・戦略上の必要による地域振興政策による形成を基本に考えておく必要がある。土地に強く終まり、在地の人々の強い執着と共同体的な協働作業によって耕地が開発維持され、その単位をもって用水管理も行い、国家などの政治集団やその政策に対峙している「村落」といったイメージ、日本人的な「在地自然村」や「農民」「百姓」といったイメージは、これらの文書に現れる屯田集団を考える場合にまず破棄しておく必要がある。自然的（例えば寒冷化、乾燥化などの圧力に従う人口移動、飢饉や戦乱に伴う難民流出）また人為的（広大な地域へと国家展開する為の強制的な人口移動、難民の再配置、戦争捕虜の武装解除を目指す地域換えや遠隔地への入植など）原因による日常的とも言う人口流動のイメージをもつことが、この地域を含む広大な大陸部の歴史社会の理解には不可欠であると思う。また、ここに現れる河川にしても、乾燥地における灌漑技術を駆使して、国家的見地から、その統括経路によって管理運営される、一種の「生産ライン」として理解する方が良いのではなかろうか。（木下鉄矢）

2. F116:W66（竹紙、残、公文の草稿で書き直しあり、草行書、縦 253mm×横 235mm）

兵工房准

本路同知暗伯承務关☐

职提调本路概管☐

例自下而上分俵水☐

依准所照得河水即目微小将欲凿

☐免不依照前例差人前去关闭

得利前域浇溉田苗诚恐旱损

☐关请及以免

兵工房(1)准

本路同知(2)暗伯承務(3)関、■

本*職提調本路、概管■

依*例、自上而下分俵水渠?*、■照?*

依准抛?* (4) 照得、河水即目微小、将欲鑿 ■* (5)

不*免 (6)、不依照前例、差人前去關閉 (7) ■*

得利、前域 (8) 澆溉田苗、誠恐旱損、

☐関請及以免 ■

兵工房が受け取った本路同知アンベイ Ambei 承務郎の関に、……わたくしめは本路を担当し、…を管理しています。……決まりに従って、上から下へと水渠(?)を分配し、……照らして従います(?)。さて、河の水がいまわずかなので、…を掘ろうとしても、……は免れず、前例に従って、人をつかわして出かけて行って…（水門?）を閉じ、…して利を得、前の地域で耕地の作物に水を注がなければ、誠に旱害によって作物を損なう恐れがあります。……関を送ってお願いし、及び以て…を免れ…（最後の行不明）

(1) 兵工房：「房」とはもともと部屋の意味であるが、転じてある官庁の中で行政実務を分担する部署を指す。エチナ路総管府においては、出土した文書から吏礼房・戸房・錢糧房・刑房・兵工房・司吏房の六房の存在が確認される。（『黒城出土文書』上篇「黒城出土文書総述」P. 14 を参照）

(2) 同知：路総管府において、達魯花赤（ダルガチ）、総管の二人の長官に続く次官クラス。ランクは正五品。

(3) 承務郎：承務郎は文散官という文官のランク（全部で九品に分かれている）を表し、俸給の基準となる。承務郎のランクは従六品上。

(4) 照依准抛：原文の「依准所」の三字では読めない。「依准」と読む場合、「～に依准し」と読み、「～」の部分には二字以上の言葉が来るはずである。後には「照得」とあって、その前で必ず文が切れなければ

の部分には二字以上の言葉が来るはずである。後には「照得」とあって、その前で必ず文が切れなければならないので、「准」の後に一字しかないことになる。ゆえにかりに「照依准拠」としておいた。

(5) ■：五行目六行目ともに次の行の冒頭にはそのままではつながらない。脱字があることを想定せねばならない。

(6) 不免：「…は免れない」の意に解した。

(7) 関閉：閉じるの意味。直後が残欠していて読めないが、恐らくは水門を閉じることと考えられる。

(8) 前域：未詳。あるいは誤字があるか？

エチナ路総管府の次官である同知のアンペイという官僚が、エチナ路の兵工房に送った報告文書（関）。これもまた、1の文書と同様、農耕地の実地検分の報告であると考えられる。次官クラスの同知が灌漑に関する職務を管轄し、水の分配を統制していたことが分かる。残欠が多いため、他の読み方も考えられ、今回はさしあたり上記のように訳しておいたが、木下氏から次のような解釈の可能性のご指摘を受けた。

テキスト6行目「不免」以下の解釈について

「不免」を7行目「得利」までかけて解釈することは出来ないか。すなわち、上から、河水が現在ずいぶんと細くなっているの、何らかの開鑿工事を行いたいのだが、それを実行するには、「前例に依拠せずに、人をやって水門を閉じて……（何々し）利を得るということをやらざるを得ないが、（そのように常例を破って水門を閉じれば、従来そこから灌漑されていた耕地に水が行かないことになり）前域（その水門から先に灌漑路が伸びている地域）の澆漑していた田苗は干上がってだめになってしまうしかないと考えられます。このような措置をとることを関を送ってお願いするとともに、……（その措置によって従来どおりならば灌漑の益を受けているべきである地域にこの非常措置によって損害が及ぶに違いないという事態をお含み置きいただき、そのような事態についての責任を、大事の中の小事として）免責していただきたく……」と読む方向もあるのでは？（木下鉄矢）

3. F116:W20（竹紙、残、行書、縦 355mm×横 195mm）

☒社長

☒俵水

☒官限 ☐閉水口外其余官员赴府

☐仰差

元統三年三月初六日施行㊦

■社長■

■俵水(1)

■官限期*閉水口外、其餘官員赴府

☐仰差■*(2)

元統三年三月初六日(3)施行△

……社長……

……俵水

……官は期限を限って水口を閉じるほか、その他の官員は役所に赴いて、…仰せて…を派遣して、

元統三年（一三三五）三月初六日施行

(1) 社長、俵水：郷村管理組織に社というものがあり、中国本土では五十家ごとに一つの社が立てられ、社ごとに社長が置かれるという制度があった。エチナ路では、屯田組織は水渠ごとに組織されていて、渠ごとにいくつかの社が設けられ、有力戸が就く職役である社長が社ごとに置かれた。また渠には俵水と呼ばれる職役も置かれ、その名から考えると、農業用水の分配を行ったと考えられる。事例としては『黒城出土文書』P. 90/F105:W2に、沙立渠と本渠の社長・俵水の名前が出ている。

(2) 仰差■「仰せて～を差わしむ」：仰は上から下への命令を意味する。差は派遣するの意味なので、必ず目的語を取る。ゆえに差のあとには脱字を想定せねばならない。

(3) 初六日：モンゴル時代の文書の日付で、一日から十日までについては、必ず「初」が頭につく。これはモンゴル語で「はじめの～日」（数字の後に初旬を意味する sine がつく。初六日であれば、“jirxuḡa

sinete”という。)という言い方に対応している。モンゴル語が漢文の書写法に影響を及ぼしている例である。

残欠が多く内容はあまり分からないが、官員に対する役所（すなわちエチナ路総管府）への出頭命令およびある職務への派遣命令であると考えられる。背景には天災など何らかの緊急事態を想定しているのか、あるいは日常的な業務なのか、どちらとも決めがたい。三月は太陽暦では四月ごろに当たり、祁連山の雪解け水がエチナ河を流れ下ってくる時期と考えられ、もしかするとそれとの関連があるかもしれない。ちなみに、日付の後に朱印が押されているので、この文書はカラホト文書中に間々見られる写しや草稿ではなく、実際に施行された公式文書である。

4. F111:W64 (竹紙、残、公文の草稿で書き直しあり、行草書、縦 180mm×横 140mm)

☒地段四至实损分数

首并无不断实乞

☒户业办屯粮九百余

☒家人种田苗干旱死损

☒开坐谨呈申覆伏乞

☐验施行须至呈者

■ 地段四至(1)、実損分数(2) ■

首?并無不斷、実乞

■ 戸業辦屯糧九百餘石?*(3) ■

■ 家、又?*(4)種田苗、干旱死損 ■

■ 開坐、謹呈(5)申覆(6)。伏乞

照*驗施行、須至呈者。

……地段の四至、実際の損失の分数を……はじめ(?)ならびに断ぜざるは無く、まことにお願いいたします。……戸はすでに蓄えた穀物九百(石?)あまりを処理し、……家は、また(?)作物を植え、旱害による損失……を箇条書きにし、謹んで呈文を送り申し上げるものであります。伏してご検討の上ご処分していただきたく願います。呈を送るべきものであります。

(1)四至:ある土地の四方の周囲の土地のことで、東西南北それぞれについて記される。戸籍や土地台帳、契約文書などで土地の位置を表すために用いられる。

(2)実損分数:損失を被った農作物の割合を表す。路総管府をはじめとする各地の地方官庁から肅政廉訪司に災害の報告がなされ、肅政廉訪司から官僚が派遣されて、災害地において農作物の被害状況の实地検分が行われる。その实地検分を受けて被害状況の「分数」が決定され、十分して八分以上損失があれば税が全て免除され、七分までの損失であれば損失分については免除され、収穫が六分に達した場合(すなわち損失が四分以下の場合)には通常どおりに税が徴収されることになっていた。つまり、農作物の災害に応じて免税をどうするかを決めるためにこの「分数」が用いられるのである。

(3)石:原文では口になっているが、穀物を数える単位が入ると考えられ、「石」を補った。

(4)又:原文では「人」になっているが、うまく読めない。かりに「又」の字としておく。

(5)呈:文書の種類の一種。下級官庁および官僚から上級官庁に送られる上向文書で、ここではエチナ路総管府から河西隴右(北)道肅政廉訪司(治所:甘州)へと送られた文書である。

(6)申覆:下級官庁・官僚から上級官庁に文書を送ること。

本文書は呈であることから、エチナ路総管府から河西隴右(北)道肅政廉訪司に送られた文書であることが分かる。本文書は書き直しがあるので、恐らくはエチナ路総管府で書記が書いた文書の草稿であろう。残欠が多いために内容はじゅうぶんには分からないが、災害時の農作物の損失とそれに対する対処に関する報告であると考えられる。肅政廉訪司は中央の御史台系統に属する監察機関であるが、地方の農政全般をつかさどり、災害時における現地の实地検分も担当する。それゆえ、路総管府から肅政廉訪司にこうした報告が行われるのである。エチナ路における旱害の実例である。

5. Y1:W140 (竹紙、残、行書、縦 288mm×横 67mm)

催府判以下河渠司一檢十月廿五日

一檢十一月初十日

催府判(1)以下河渠司(2)一檢十月廿五日

一檢十一月初十日

路総管府判官以下の河渠司に促して、すべて検査をすること十月二十五日

すべて検査すること十一月十日

(1)府判：路総管府の判官。同知に継ぐ次官クラス。

(2)河渠司：灌漑用水を管掌する役所。『黒城出土文書』では、Y1:W30(P. 94, 図版参)のエチナ路総管府の司属一覧のところにみえている。

断片なのでその意味するところは不明。「検」する対象が何なのか、帳簿なのか、あるいは水渠なのか、分からない。

6. F209:W47 (麻紙、残、草書、縦 182mm×横 133mm)

☒ 膘七分

廿九 何的火者 ☐ 紫扇馬 膘七分

卅 昔児答 ☐ 紫騾馬 膘五分

☐ 一 脱児伯歹吉青全馬 膘七分

☐ 如普帖木

☒ 二黄全馬 膘六分

■ 膘七分

廿九 何的火者 ☐ 紫扇馬 (1) 膘七分 (2)

卅 昔児答 ☐ 紫騾馬 (3) 膘五分

卅* 一 脱児伯歹吉青全馬 (4) 膘七分

卅二* 如普帖木

■ 二黄全馬 膘六分

…… 膘七分

二十九、何的火者 (カーディー=ホージャ Qādi Khwaja) 紫の驕馬、膘七分

三十、昔児答 (シルダ Sirda?) 紫の牝馬、膘五分

三十一、脱児伯歹吉 (ドルベ=タイジ Dörbe-taiji) 青の牝馬、膘七分

三十二、如普帖木 (如普テムル Temür) …二(?) 黄の牝馬、膘六分

(1) 扇馬：驕馬のこと。(モンゴル語では aqta)

(2) 膘七分：「膘」とは家畜が肥っていることを形容する言葉。「膘～分」で家畜の肥り具合を表しているものと考えられる。

(3) 馬：牝馬のこと。(モンゴル語では gegüü)

(4) 全馬：未詳。ただ、「扇馬」が驕馬、「騾馬」が牝馬を意味する以上、全馬が去勢されていない牡馬、特に種牡馬のことを意味する可能性があり、ここでは牡馬と訳しておいた。

馬の帳簿か？最初に番号が付けられ、所有者の名前、馬の毛色・種類・肥り具合が列挙される形式になっている。この帳簿は短い断片であるが、馬の毛色の表し方、「扇馬」「騾馬」「全馬」といった馬のカテゴリ分け、馬の善し悪しを判断する指標として「膘～分」という言い方をしていたことなど、モンゴル時代エチナ地方における馬についての漢語による言語表現を示すものとして貴重なものである。(本条および次の二条に見える家畜に関する記述の解釈については、フフバートル氏のご指摘に負うところが大きい。)

7. F111:W67 (麻紙、残、行草書、縦 215mm×横 320mm)

□年 月

六月初四日

省府充□者帖木□□经历点视

见在头正

骆驼卅二只 牛七只

驴三头 □十五口

倒死

大羊十三口

马二疋牛二只羊五十六口殺羊六口

羊羔卅七口

九月廿九日检呈

死羊殺殺一五口系七月八日

十一月□官

■年 月

六月初四日

省府(1)充完*者帖木児?*□経歴(2)点視

見在頭正

駱駝卅二只 牛七只

驢三頭 羊*十五口

倒死

大羊十三口(3)

馬二疋牛二只羊五十六口殺羊六口(4)

羊羔卅七口(5)

九月廿九日檢呈(6)

死羊殺殺十*五口係七月八日(7)

十一月■官

……年 月

六月四日

甘肅行省がオルジェイ=テムル Öljei Temür 経歴を充てて点検させた。

現在の頭匹

駱駝32只 牛7只

驢馬3頭 羊15口

倒死

大羊13口

馬2匹 牛2只 羊56口殺羊(種オス?)6口

羊羔(子羊)37口

九月二十九日檢呈した。

死んだ羊殺殺(?)15口は七月八日に係る。

十一月……官

(1)省府：甘肅行省のことであろう。

(2)経歴：事務長クラス。行省の経歴は史料上確認できない。行省の命令でエチナ路の経歴が派遣されたということか？検討を要する。

(3)大羊：成長した大きい羊のこと。

(4)殺羊：現代語では「公羊」と言い、すなわち種オスのことを指すと思われる。「牝」ともいう。

(5)羊羔：「羔」とは小さい羊のことを言う。子羊。

(6)検呈：未詳。

(7)羊殺殺：未詳。「六月四日 見在」にみえる「羊十五口」に対応し、残っていた羊が死滅したことを意味するのか？

甘肅行省の命令で官員が派遣され、家畜を点検。この文書では、多くの家畜の「倒死」が報告されている。何らかの自然災害があり、家畜が死んでいるとの報告が甘肅行省に行き、それを受けて行省が官員を派遣し、現地調査を行わせた、と解釈できようか。六月にまず一度点検し、そして九月に再び点検し、最後の十一月は年末恒例の行政報告と考えられる。羊の様々な呼称が現れており、検討を要する。

8. F79:W23 (麻紙、残屑、行草書、縦 185mm×横 46mm)

一户赤丹不顔台黒公駱駝一只

九岁驃五分

一户足兀产玉白花公拐駝一只

一户赤丹不顔台黒公駱駝一只(1)

九歳 五分

一户足兀産玉白花公拐駝一只(2)

一户、赤丹不顔台(チダン=ブヤンタイ Cidan Buyantai) 黒の種オス駱駝一只

九歳、五分

一户、足兀産玉 白の斑の種オスの足の不自由な駱駝一只

(1)黒公駱駝：「黒」は毛色。「公」は種オスを指す。

(2)白花公拐駝：「白花」は毛色、白い色で斑がある、ということ。「拐」は足が不自由であることを意味すると考えられる。

家畜の帳簿か？所有者の戸の名前、家畜の色・種類・年齢・肥り具合を記すという形式になっている。

9. F277:W55 (棉紙、もとはウイグル体蒙古文の印本仏經の残葉、表の文字は「契約類」を参照、本条

□逃人民官吏料理乘騎各要首思不□差等除

即捉拿解省把緊關隘口時常巡綽嚴加□

各毋致亂軍侵襲与民為害据□息声息火速

飛報施行奉此那孩依奉前去馬木□□子等处

撫体人民劝与农民□□照得人民俱各病疾飢

餓身体无力不能挑□水澆□农民□

并无牛具子粒亦无耕种秋田合將已种□□二

麥等物各各所种石数□花户姓名从实坐开前

去合行

具呈伏乞

照驗施行□

一总计小麦□

は背面の文字である、草行書、縦 338mm×横 215mm)

□逃人民、官吏料理乘騎(1)、各要首思(2)、不論?*差等(3)。除

即捉拿解省(4)、把緊關隘口、時常巡綽*(5)、嚴加□

備、毋致亂軍侵襲与民為害、抛□□?* (6) 声息、火速

飛報施行、奉此(7)。那孩(8)依奉前去馬木□□*子等处(9)、

撫体人民、勸与農民□□(10)。照得、人民俱各病疾飢

餓、身体無力、不能挑(11)■水澆田?*■農民■

麦(13)等物各各所種石数□花戸(14)姓名從實坐開前

去、合行

具呈(15)、伏乞

照驗施行。須*至*呈*者*。(16)

一、總計小麦■

『……逃の人民は、官吏が処理し馱馬に乗り、それぞれ供応物 *si' üsü* を必要とすることは等級によらない。ただちに引っ捕らえて省に送り、堅固な関所を押さえ、常に見まわり警戒をし、厳しく…備を加え、乱軍が襲撃してきて民に害を及ぼすことがないようにするほか、……の消息については、大至急知らせて施行せよ。これを奉ぜられよ。那孩(?)は(箭付に)従って馬木……口子等のところへ出かけていき、人民をいたわって、農民に勧めて……しました。さて、人民はみな病気になる飢えており、体には力が無く、(水路を?)…掘ることもできません。……水を(分配し?)農地に水を注ぎ、……農民は……まったく耕牛・農具・種子も無く、また耕し植える秋田も無く、既に植えた大小二麦などの物についてそれぞれが植えている石数、…各種の戸の姓名を事実どおりに箇条書きに書き記すべきであり、まさに呈を具えるべきであり、ご検討の上ご処分していただきたく伏して願います。呈を送るべきものであります。

一、小麦……を總計すると、……

- (1)乗騎：ここでは、単に馬に乗ることではなく、馱伝(ジャムチ)の鋪馬に乗ることを言う。
- (2)首思：供応物を意味するモンゴル語 *si' üsü* を音写したもの。公人がジャムチを利用する際、モンゴル時代の馱伝の宿場では、羊(肉)・米・麵・酒などが身分ごとに差等をつけてふるまわれていた。
- (3)不論差等「差等を論ぜず」：等級にかまわず、という方向の意味になるので、□には「論」を補った。
- (4)解省「省に解す」：ここでの省は恐らく甘州にある甘肅行省を指すと考えられる。
- (5)巡綽：「淖」では読めない。「巡綽」は巡回警戒するという意味の決まり文句であり、『黒城出土文書』の文字転写の際のミスである。
- (6)□：原文では「息」とするが、読めない。□としておいた。
- (7)奉此：「箭付」「指揮」文書の結び文言。「奉」は、下級官庁・官僚が上級官庁から文書を「受け取る」という意味。ここでは、甘肅行省からエチナ路総管府に送られた文書と考えられるので、前者の箭付文書の結び文言であると考えられる。
- (8)那孩：未詳。人名と解すれば犬を意味するモンゴル語 *noqai~noᠬai*。ただし、「そのように」を意味する「那般」の誤字の可能性もある。
- (9)馬木□口子等处：甘肅行省の箭付の中に、「把緊関隘口」という言葉があったので、「□子」は山谷のせばまった入り口を意味する「口子」であると考えて字を補った。
- (10)勸与農民□□：□□には動詞が入り、「農民に勧めて～をさせる」と読むことができる。文脈から考えるならば、農民を集めて定着させる、という方向の意味になるであろう。
- (11)挑…：「挑」は掘るの意味で、恐らく水路を掘ることを言う。『元典章』卷二三、戸部・農桑に水路を掘削することを「挑掘」と記しており、ここでも「挑」の後に「掘」が入る可能性がある。あるいは「渠」が入る可能性もある。
- (12)秋田：『元典章』卷二三、戸部・農桑において、「夏田」に対し「秋田」を並列させる言い方があるので、秋に収穫される田地のことか？
- (13)大小二麦：『黒城出土文書』の他の箇所に用例あり。
- (14)花戸：「花」はさまざま、雑多の意味。各種の戸を意味する。
- (15)合行具呈：この語句より、本文書が「呈」であることが分かる。つまり、エチナ路総管府から河西隴北道肅政廉訪司に送られた文書であると考えられる。
- (16)須至呈者：文書の結びの決まり文言が入るはずなので、この四字を補った。1の注(4)を参照。

エチナ路総管府から河西隴北道肅政廉訪司(治所：甘州)に送られた呈文。「奉此」までの文章は、呈文の中に引用された甘肅行省からの箭付である。『黒城出土文書』一〇二頁および一八九頁の本文書の説明によると、もともとはウイグル字モンゴル文の仏經として用いられたもので、表側は經文の隙間に契約文書を記し、本文書はその裏に書かれたものであるという。つまり、一枚の紙を再々利用したのであり、当時紙がまだまだ貴重であったことがうかがわれる。本文書はエチナ路総管府から肅政廉訪司に送った

ものであるから、恐らくは草稿あるいは写しとして書かれたものと推測される。表側の契約文書には幸い「至正卅年（一三七〇）六月」という日付が記されており、一概に同時期のものとは断定できないものの、恐らくは本文書は至正三十年前後の文書で、元明交代期の混乱のもと出されたものであると推定される。

10. F116:W551（竹紙、残、楷行書、縦 243mm×横 267mm）

☒道廉訪司承管

☒

☒道廉訪司路府州县多行文书来

☒里经历苗好谦两淮做僉事

☒的各项节次

☒交廉訪司用心提调农桑成就呵□

☒有成效的添与各分怎生奏呵奉□

☒咨略行点视得大都良乡范阳等县农桑比

☒生成畦桑亦不依法播种耨耘浇灌围护

☒提调之司不为整治亲临官司失于劝

☒栽畦桑各处数目□司除外合下仰照验钦依

☒去体式明白分豁类报帐册申解

☒日钦奉

☒处行☒钦依☒

■各*道廉訪司承管

■

■各*道廉訪司路府州县多行文书来。

■裏、經歷苗好謙兩淮做僉事(1)

■的各项節次

■交廉訪司用心提調農桑、成就呵、□

■有成效的、添与名*分(2)、怎生。奏呵、奉

聖*旨*(3)、那*般*者*。欽*此*。■咨(4)、略行(5)、点視得、大都良郷・范陽等県(6)、農桑比

■生成畦桑、亦不依法播種・耨耘・澆灌・圍護(7)、

■提調之司(8)不為整治、親臨官司(9)失於勸諭、以致?*

■栽畦桑各处数目、本*司(10)除外、合下仰照驗、欽依

聖*旨*事*意*■照?*依?*連*去体式(11)、明白分豁、類報帳冊、申解

■日欽奉

聖*旨*■处行■欽依施*行*■

……各道廉訪司は…を引き受けて管掌し、……各道廉訪司は路・府・州・県に多く文書をくだした。……
經歷の苗好謙が兩淮で僉事となって……の各項で順番に……廉訪司に心を用いて農桑のことを管轄させ、
成就したならば、……成果のある者には名分を与えればどうか。」と奏したら、お受けした聖旨に、「そ
のようにせよ。これを欽め。」……咨に、略行(?)、点検したところ、大都の良郷・范陽等県は、農桑が
このごろ……畦の桑を育てはいるものの、それでもなお決まりにしたがって種を播き、草刈りをし、水
を注ぎ、囲んで防護せず、……管轄の役所がきちんと治めず、(民に)親しく臨む役所が(農桑の)奨励
を失し、そのために……となってしまう(?)。……畦の桑を植える各地の数字・項目は、本役所は
当然のこととして、ただちにおおせて検討の上、聖旨の意に欽んで従い……書き連ねた定式に則って、
はっきりと分けて類別して帳冊を報告し、……に送り、……日に欽んでお受けした聖旨に、……处行(?)
……欽んで従って実施せよ。……

(1) 経歴苗好謙兩淮做僉事：苗好謙は東平（現山東省）の出身で、農業技術に精通し、元代の農業振興政策推進の中樞を担った実務官僚の一人である。彼は至大二年に淮西道廉訪司僉事となり、種蒔の法を武宗カイシャンに献じ、その法を各地に頒布したという記事が『元史』卷九三、食貨志、農桑にみえ、恐らくそのことを指していると考えられる。延祐年間には彼の著した『栽桑図説』が刊刻され、全国に千部配布された。その後『農桑輯要』とセットで全国に配布された『栽桑図』は、この苗好謙の著した『栽桑図説』のことであろう。

(2) 名分：「各」では意味が通じない。肩書きなどを意味する「名分」が正しい。転写の際の誤りである。

(3) 奏呵、奉聖旨、那般者。欽此。「奏したら、奉じた聖旨に、そのようにせよ、これを欽め。」：「奏呵」は「奏したら」と読み、官僚が大カアンに対して上奏することを言う。奉の字の後に「聖旨、那般者。欽此。」という定型句が来る。この部分は、上奏に対する裁可が行われたことを意味する。「聖旨」とはモンゴル語ジャルリク Jarliq のことで、大カアンのおおせを意味し、文書の中では敬意を表すべく改行して擡頭して記すことになっていた。モンゴル時代の文書行政においては、この聖旨ジャルリクが全てを超越する絶対的な効力を持っていた。

(4) 咨：この咨がどこからどこへ送られたものなのか不明。

(5) 略行：未詳。

(6) 大都良郷・范陽等県：良郷、范陽はいずれも現在の北京の郊外で、良郷県は盧溝橋を越えたところがあり、范陽県はさらに南に下ったところであり、一州とも言った。

(7) 播種・耨耘・澆灌・困護：桑を育てる過程を示している。それが当時、きちんと決まりの通りに行われていなかったのである。

(8) 提調之司：農業を管轄する役所のことであるが、具体的にはここでは肅政廉訪司を指すと考えられる。

(9) 親臨官司：親民官ともいう。元代で言えば、民を直接管理する路・府・州・県の地方の役所のことである。

(10) 本司除外：「本役所は当然のこととして」の意で、文書の決まり文句。ゆえに「本」字を補った。問題は、この「本司」がどこの役所を指すかである。ひとつには、上に出てくる上奏の中に肅政廉訪司が出てきていることから、河西隴右（北）道肅政廉訪司のことを指す可能性がある。またもうひとつには、中央政府のもとで大元ウルスの農政全体を統轄する大司農司の可能性もある。

(11) 照依連去体式「連去せる体式に照依し」：『元典章』卷一五、戸部・祿廩に用例あり、三文字を補った。「書き連ねた決まった様式にのっとり」こと。

前半部分は、肅政廉訪司に関わる記述であることから、監察系統の官僚による上奏であろう。そして、その上奏を裁可する聖旨が出されている。その後の部分は、残欠が多いためによく読めない部分が多く、文書のやり取り、経緯などについては解しがたく、なおも検討を要する。いずれにせよ桑の栽培を決まり通りに行わせ、それについて書式サンプルに基づき「帳冊」にして報告することを命じた行政文書であることだけははっきりしている。